

蘇芳集

お中日

青山

丈

転がしてみると転がる寒卵
一跨ぎした水音の雪解水
少しだけ並んで買つて雛の夜
地下へ下り地上へ出るとお中日
隅田川まで来てみると春の川
歯を磨くたび人参が目に入る
目の前と次の椿と見てをりぬ

北窓開く

吉田幸敏

横浜や林火の句碑に春の雨
わが身よりあふれ白木蓮咲き満てる
東日本大震災忌石を積む
約東の三月十一日の蝶
円覚寺方丈裏の涅槃雪
ホチキスのかちりと春の寒さかな
北窓を開き時計を合はせけり

卒業

小川美知子

寒い日は寒い日の唄鍋洗ふ
熊笹の風音春の来たりけり
春のはじまる傘に降る雪の音
会ひに行く電車の加速春落暉
フライパンにこびりつくもの春の暮
料峭の線路に雨の降りしきる
卒業の子と夕暮を歩くなり

春 愁

川上昌子

ほころびを繕うて春立ちにけり
午祭こはさぬままの母の家
亀鳴くや玄関に靴混みあひて
梅の花むかし寺町宿場町
愛の日や遅れがちなる腕時計
木の芽晴旅のリユックの前後ろ
春愁のとどのつまりの噓かな

逸るもの

木内憲子

紅梅や身のうちがはに逸るもの
しんしんと更けて月下の一冬木
臘梅やまだまだ硬き風の息
鏡中の吾にも春の立ちたるや
紅梅やポケットに鳴る電子音
春雷や片の付かなきことばかり
春めくはひと日ひと日の皿小鉢

蝶と吾と

清水裕子

窓を打つ風を恐るる蝶と吾と
野遊びの風が攫つて紙袋
影踏み少年少女春深む
お社の闇ふかぶかと豆を打つ
古民家の縁なき畳梅二月
紅梅の落花促す鳥のこゑ
素通りの靴音ばかりひひなの夜

梅白し

下平直子

夕映の筑波嶺に礼鬼やらひ
菜畑の一雨の湿り寒明けぬ
ひとり夜のあちこち灯す余寒かな
梅の風朝のはじめの鳥の歌
薄氷や一水わたる風青く
窓まどの雛の灯潤む雨の路地
梅白しそろそろ心決めるとき

寒 椿 富田正吉

垣繕ひ

別府

優

嬉しさうに冬の椿を掃きにけり
あざやかな夢のつづきの椿かな
今生は今のいまなり寒椿
寒椿好きな理由と云はれても
寒椿確かなものに今日と我
ちよつといい椿を見たと言つておく
紅椿見てから頭ちやんとなる

螺旋階 野路 斉子

螺旋階あれば使ひて蝶の昼
蝶々は追ふもの飛べるならとんで
芽立いま粒揃ひなる鬼くるみ
風待ちの春の落葉であつたかと
チューリップ描くときみんなチューリップ
帰る鳥見送る窓をくもらせて
よべの雨乾く間もなく森五月

さまざま

前田 陶代子

白梅の鳥籠めける処かな
父の忌の垣繕ひをして帰る
鍋肌に生醬油まはす建国日
ひとつづつ影を増やして雛飾る
使ひつつ身を愛しむ木瓜の花
ひと言に背中押さるる春の雪
三桎やうつし世の今どのあたり
わが影を容れて寒九の水のいろ
ポケットに拳の重し枯深し
冬深しわが吐く息も靴音も
涸滝の音なき音に真向へり
臘梅を見てその辺も見て帰る
考へる眼鏡はづせば目の寒き
老いといふかたちさまざま枇杷の花

風光る

松原ふみ子

溪流の音ひそやかに木の根開く
春寒し十指閉ぢても開きても
上州に三山のあり桑解く
雪しろや仰ぎて峰の耳二つ
みどりごの一步一步に風光る
逃水を追へば果てなし高速路
暖かやけんけんばあとまだ跳べる

きさらぎ

峰岸よし子

あしかびや水の逡巡はじまりぬ
大仰に潜きて春の鳩なりけり
こころ水あづけてをれば初蝶来
あとがきのさらりと春の氷かな
如月の脚下げて鷺翔ちにけり
ど忘れの一語に執しゐる日永
梅月夜ゆきひらに粥ふつつと

春の宵

宮尾直美

魚の粗とろと冬を惜しみけり
紅梅や文筥に残る母の文字
料峭の石屋にほとけ生まれけり
野火消えてぼつりぼつりと生活の灯
鉄瓶の滾る音して春の宵
末黒野に出て昼月と吹かれをり
三姉妹老いて健やか春炬燵

二月尽

八木下末黒

夜通しの春一番や雨戸鳴る
紅梅のおほかた終る雨の中
冴え返る踏石一步二歩三歩
山菜莢のほつりほつりと雨細く
割竹の結はれて青し二月尽
冴え返る櫂ごろりと皮剥がれ
不器男忌の雨やながなが煉瓦堀